

日本植民地文化運動資料 3

復刻版

收書月報

全八卷
別冊一

東北アジア史研究に

必須の基礎資料！

満鉄奉天図書館編

緑蔭書房



『日本植民地文化運動資料』刊行にあたって

近年、日本植民地の研究は質量とも大きな発展を遂げつつあるが、まだまだ政治・経済的側面への偏重は否めない。より構造的に浮き彫りにするために文化史的な視点からの分析が必要である。本資料集の刊行は植民地研究の上で、これまで不十分であった文化運動関係の資料を提供しようとするものである。

本資料集が対象とする地域は、戦前・戦時中、日本が植民地としていた地域及び占領地域である。即ち台湾、朝鮮、満洲、樺太を中心に中国(満洲を除く)、フィリピン、ペトナム、タイ、ビルマ、マレーシア、シンガポール、インドネシアそれに南洋諸島等の所謂「大東亜共栄圏」とほぼ重なる地域を対象とする。

また対象とする分野は官民・民族を問わず広く知的・精神的・思想的運動を含む。例えば新聞・雑誌・放送・映画・図書館等の諸メディアから教育、文芸、言語、都市計画・建築、社会・生活改造等である。

本資料集は、最初に日本植民地下でどのような集積がなされていたのか、それが最もよくわかる図書館資料を刊行し、随時他の分野の資料も公刊していく予定である。

『收書月報』復刻にあたって

『收書月報』は満鉄奉天図書館の館報として、一九三六(昭和一一)年二月に創刊、一九四三(昭和一八)年九月、通巻九一号まで刊行された。奉天図書館は大連図書館や哈爾濱図書館とともに満洲における三大図書館として知的集積の核を形成していた。

その満鉄三大図書館の機関誌『書香』(大連図書館)、『北窓』(哈爾濱図書館)及び『收書月報』(奉天図書館)の復刻版の刊行により、満鉄図書館史研究の基本的資料が揃うことになり、その全容の解明が期待される。

さて、本誌『收書月報』の特色と内容は、奉天図書館の活動を記録した一級の文献であることと、何よりも館長衛藤利夫の個性と情熱によって収集された密度の濃い蔵書群を反映している点にある。その密度の濃さはとくに、交通・工学及び満蒙・シベリア等辺境研究図書に表われている。質量ともに充実したこれら資料を駆使した多数の研究論文や書籍・雑誌題解や紹介は、東北アジア史研究、中国史研究に欠かせぬものである。

更に戦後初代の日本図書館協会理事長として、日本図書館界の再建に尽力し大きな影響を与えた図書館人としての衛藤の個人史研究にも必須の資料である。

『日本植民地文化運動資料』関係年譜

明治39年 南満洲鉄道株式会社創立
明治40年 満鉄調査部に図書室設置(後の大連図書館)
明治43年 韓国併合
奉天、長春など八ヶ所に図書閲覧場設置

大正3年 第一次世界大戦勃発

大正4年 列軍文庫設置

大正5年 南満洲司書会成立『南満洲司書会雑誌』創刊

大正7年 大連図書館創立

大正8年 朝鮮三一運動

大正9年 奉天簡易図書館を本社直営とし、奉天図書館に改称

大正11年 衛藤利夫、奉天図書館長に就任

大正12年 哈爾濱図書館設立

大正14年 『書香』創刊

大正15年 柿沼介、大連図書館長に就任

昭和3年 張作霖爆殺

昭和4年 満鉄図書館業務研究会開始

『書香』復刊→19年休刊

昭和6年 満洲事変

前線兵士への陣中文庫開始

昭和7年 満洲国建国

『全満24図書館共通満洲関係漢書件名目録』刊行

昭和10年 朝鮮総督府図書館報『文献報国』創刊→19年廃刊

昭和11年 奉天図書館『收書月報』創刊→18年休刊

日中戦争始まる(7月)

満鉄附属地の行政権を満洲国に移譲

『図書館新報』第二次創刊、17号より『満洲読書新報』と改題

昭和13年 新制図書館研究会第一回委員会開催

昭和14年 大調査部体制となる

昭和16年 哈爾濱図書館『北窓』創刊→19年休刊

昭和17年 満洲国図書館協会発足

満鉄調査部事件

昭和20年 日本敗戦

長白山史料斷片

奉天考古日誌

奉天長沼附近遺蹟發見



まへがき

- 目次
- まへがき
- 一、長白山の自然
- (一) 滿洲の地形
- (二) 滿洲の火山
- (三) 長白山の地物
- (四) 長白山の生物
- (五) 生物を著し長白山
- (六) 長白山生物の特徴
- (七) 長白山の植物
- (八) 長白山の由来
- 二、長白山登山調査の
- (一) 滿蒙
- (二) 近代
- 附
- 年表
- 参考文献

私が奉天へ移り住んで満五年餘、今では「おゝ奉天我等が奉天と、生活にはあえぎ乍ら、郷土的愛着を感じて、もつと深く此の大奉天の姿を認識して、其の往古の姿を少しでも何かの形で明らかに知りたい、希望に燃えてゐる。

日本に於ては數千年來支那の學問を漢學と稱し、支那文即ち漢文で書かれた古典本を漢籍と稱して來た。従つて漢籍と申す漢籍の概念を得るには欽定四庫全書の概略から記述すべきで四庫全書に網羅された漢文で書かれた朝鮮、支那本、油印本、す、即ち日本延長とも申す

かかる概念を以て私は奉天圖書館に於てたつさわり五萬餘冊の漢籍を整理し、清儒の王鳴盛は「

植野

近世露清關係史

稀覯書「東北鞆靴」

貴重なる滿蒙文獻

本稿は、ガストン・カーエン氏の著(1730)を、これら...
原文と對居たり、...
へるが、...
とした。
りである。
英譯は、...
久しく絶版に本を使用した

殆ど毎年の様に歐羅巴に出かける自分にとつては、其の都度何かしら珍らしいものを見付けて來るのが此の頃の樂しみとなつた。去年はラフカヂオ・ヘルン殿して恰度三十三年目に當り、ヘルンに宛てたチエム・パレン博士の信書が一括されて北星堂から出版されたが、偶々自分はジュネヴからチエム・パレン博士に宛てたラフカヂオ・ヘルンの書面六十二通、其の内には未刊行の大分ある様であるが、之を皆持つて歸つて東洋文庫に收めるとが出來たのも何かの因縁であらう。

内容見本

今年の挿出物は、貴重なる滿蒙文獻ウキツエンの東北鞆靴...
あつた。
Nicolas Wissem. Noord en Oost Tartarye, ofte an eenige dier Landen en Volken. 2 vol.

漢籍分類法變遷史

奉天所藏安南國漂流記に就て

大

明和二年、と云へば西紀一七六五年、丁度産業革命の初期、アメリカの獨立戰爭も間もなく起らうと云ふ頃、支那では清の高宗三十年、四庫全書の大成に先き立つこと十七歳、西域方面に知りし事を構へてゐた頃、日本では後櫻町女帝、頼



映畫界 寸評

△文化統制は今後ますます強化されるものと豫想される。映畫と雖もその例外にあることが出來ないのは言ふまでもないことで、従つて素材の選擇範圍が一層縮小されて行くだらう。だがそれによつて映畫そのものが萎縮するやうなことがあつてはならない。

△寫眞管理法による外國映畫輸入開禁問題については、久しきに亘り種々取沙汰されて

まい。だが外畫輸入禁止が巷間傳へられるやうに、それ以外の意味をも含めてゐるとしたら大きな問題である。併しそれは杞憂であらう。何故なら今更徳川三百年の夢を繰返す愚を敢へてしないであらうから。

△少い在庫品の中から、最も期待されてゐた「大いなる幻影」「文藝ゾラ」が結局柄上映が不可能になつた、泣き面に蜂とはこのことだが、決して笑ひごとではない。

△滿映では既に第三回作品を製作中だとのことである。新しく誕生したものには、兎角空疎な世辭や景氣づけを言ふのが、世間一般の慣習になつてゐるが、そつういふ世辭から良い作品が生れて來はしない。「國策」を背負ふ滿映の前途こそ多難といふべきであらう。

△内務省では映畫法を制定すべく立案中で

收書月報

第八十九號



奉天圖書館



すいせんします(順不同・敬称略)

父の情熱再び

衛藤藩吉 (亜細亜大学学長)

『收書月報』何となつかしいことばであろうか。それは亡父利夫が大正九(一九二〇)年から昭和十七(一九四二)年まで、情熱をかけて創り上げた旧満洲奉天図書館の機関誌である(『收書月報』は昭和十一年から発刊されたが)。一見片々たるニューズレターの月刊パンフレットにしか過ぎない。しかし、館長であった父はみずからこれを編集し、近著の稀覯書(きこうしよ)の紹介から、北東アジア史関係の小論文、エッセイを掲載して、その内容の質的充実をはかった。昔、父の書齋に積まれていた『收書月報』は、その内容がわからぬ子供の私にとっても、忘れられない存在であった。

今回、大連図書館の『書香』、哈爾濱図書館の『北窓』と相並んで、『收書月報』も、緑蔭書房によって全文復刻されると聞く。専門家は、『收書月報』が北東アジア史について、寝ころがっても読める内容豊富な資料であると、高く評価して下さる。黄泉の父もさぞ嬉しいことであろう。

奉天図書館と『收書月報』

小黒浩司 (土浦短期大学専任講師)

『收書月報』は満鉄奉天図書館の館報として、一九三六(昭和一一)年二月に創刊、一九四三(昭和一八)年九月・通巻九一号まで刊行された。本誌は同館最盛期の活動を知る、最も基本的な資料である。

奉天図書館は一九一〇(明治四三)年の創立、同館は当初、奉天在住の日本人居留民向けの小図書館であったが、一九二〇(大正九)年、大連図書館と同様の、本社直営の社業参考図書館に昇格した。同館の蔵書は、本誌創刊の頃には既に七万冊に達し、満鉄の調査・研究事業を支えるとともに、東洋学の研究者や奉天市民にも広く利用された。

同館の東亜文献コレクションは世界的に著名で、本誌所載の館蔵貴重書の解題などに、その一端をうかがうことができる。また本誌には、それらの資料を駆使した東北アジア研究論文が数多く掲載され、往事の満蒙研究の水準を示している。

二〇年の長きにわたって同館館長の職にあったのが、衛藤利夫(一八八三〜一九五三)である。衛藤は戦後

『收書月報』の思い出

青木 実 (元大連図書館員)

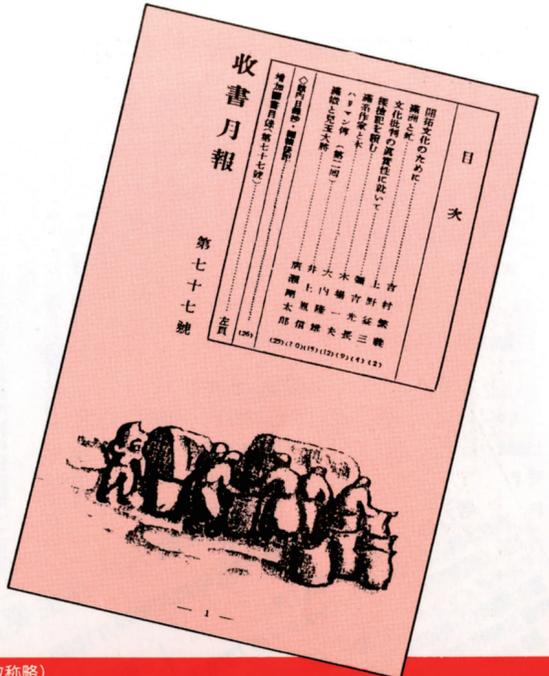
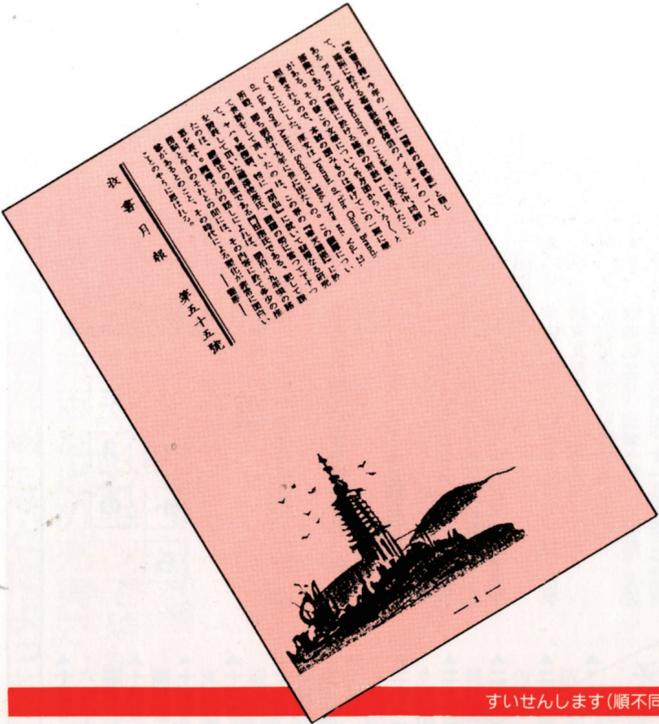
国会図書館に図書館学資料室があった時、もと奉天図書館で、漢籍専門の植野武雄(著書『滿支典籍攷』)さんの下で働いていた故高橋泰四郎君が在職して、よく厚い菊判の合本を慈しむように繰っていた。それが本書『收書月報』の何冊目かであった。整理に励み目録を作った人には、現在その所在も正確には掴めない状況になって、も愛着は深い。私は戦争の深刻化に伴う予算の圧縮下、衛藤奉天図書館長は、身辺の不幸福身も加わり、優良図書館の収集に情熱も失われつつあった。小生は僅かに『收書月報』には二篇寄稿した記憶がある。

一篇は、内地作家の満洲者作品の批判文、もう一篇は、衛藤先生の館長としての多大の功績、奉天文話会長として、小生の奉天移住と共に、幹事長を命じられた光栄の立場から「衛藤館長退任記念号」へ謝辞をついたことを記憶している。この『收書月報』を精読するために、中公文庫『韃靼』末尾の中見立夫氏の優れた「あとがき」の一説をお勧めしたい。

満蒙・辺境研究に不可欠の資料

岡村敬二 (大阪府立夕陽丘図書館司書)

満鉄社業の図書館であり調査部の参考図書館であった大連図書館は蔵書数などで一頭地出していた。一方奉天図書館も同じく満鉄社業の参考図書館であり、満鉄図書館のなかでは交通・工学、さらには満蒙・シベリアといった「辺境研究図書」を分担していたが、「二番館」の利点を生かし、また館長衛藤利夫の深い想い入れもあって、いささか趣向のこらされた蔵書も持っていた。特に蒐集に力点のおかれた満蒙関係の図書についてはM印が付けられ特別閲覧室に別置されて満洲事変以降の時局を資料面で支援し、さらに衛藤の退任記念特輯号となった『收書月報』第七四号(昭和一七年)所載の「本館所蔵東洋関係選書略目」や衛藤の手になる『奉天図書館名著解題』(『收書月報』に初出所載)五冊などに紹介された中国来訪の宣教師を含めた欧米人の著作などもそうした例である。これら奉天図書館に架蔵された図書群は、今回復刻される『收書月



すいせんします(順不同・敬称略)

初代の日本図書館協合理事長に就任し、日本図書館界の再建に尽力した人物であるが、奉天図書館のコレクション形成や本誌の刊行は、同館館長としての衛藤の功績に数えられよう。

『收書月報』の復刻を喜ぶ

大内直之 (元国立国会図書館司書)

「收書」という用語が「増加図書」に代わって使われたのは、衛藤利夫先生が初めてではないかと思われる。昭和十年(康徳二年、一九三五年)「北滿鉄路中央図書館(Bibliotheca Orientalis)」の接収の際、接収委員長田口稔氏(大連図書館)のお手伝いをするため、接収委員の第二陣として、若い職員が数名全滿の図書館から選ばれ、私は撫順図書館から同年六月、哈爾濱へ出張を命ぜられた。当時二十五歳、多少ロシア語に関心があったので、喜び勇んでハルビンに赴き、接収後の事務に参加した。蔵書の点検(本館の裏に倉庫があり、蔵書がギッシリと登録番号順につまっていた)や、アジアチカ(極東アジア文庫)の編さんのお手伝いをした。若き日のハルビンの思い出は、八十一歳の今日、なお忘れ難いものがある。その翌年昭和十一年六月、はからずも私は、奉天図書館へ転勤を命ぜられかねてから尊敬していた衛藤館長のもとで働くことになり、あこがれの奉天に赴任した。

翌昭和十二年の四月だったと記憶するが、衛藤先生から『收書月報』の編集を担当し、この機会に「收書」のアナウンスだけでなく「満洲にかかわる人と文献」などについての説物記事などを掲載したい。自分が「巻頭言」を毎月執筆するからと命じられ、若冠二十六歳の私は、感激に身をふるわせた。以来、昭和十七年の秋、東京の満鉄東亜経済局資料課に転任を命ぜられるまで、先生の薫陶のもとで『收書月報』の編さんに努めた。昭和十五年には光栄にも『満洲夜話』の編さんまでさせて頂いた。ピリオド・フィロソフイーという言葉もその頃教わった。よく奉天大和ホテルのロビーで鉄道総局の山下熊二さんとコーヒーを御馳走になりながら、満洲のこと本のことなどいろいろと有益なお話を聞かせて頂いた。昨日のことのように思い起こされる。

「巻頭言」は、亡き先生の魂が今日なお生きづいてる。

『收書月報』の復刻を喜び、祝うものの一として、まことに感激の極みである。

報」の中核をなす増加図書目録から窺い知ることがができる。また、昭和十一年二月創刊のこの『收書月報』第一号の目録には、新着図書とならんで雑誌から抜かれた記事も多くみられ(例えば「鉄道関係外国主要雑誌記事」、それは記事索引の体もなしていた。こんなことにも、満洲事変以降の時局に奉天図書館を実質的に役立てようとした衛藤らの創意が見取れる。このように、蔵書などからその文化機関の性格を検討していくためにも、この『收書月報』は不可欠の資料となる。

瘠土に咲かそう燎乱の花

中見立夫 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授)

戦前期における日本の図書館活動のなかでも、満鉄図書館は特異な位置を占めている。満鉄本社の所在地であり、豊富な資金が投入された大連図書館、中東鉄道のコレクションを受け継いだハルビン図書館に比べて、奉天図書館の活動をみると、ながらく館長としてその育成にあたった衛藤利夫と植野武雄ら図書館人の心血を注いだ努力をおもわざるをえない。大正十一年、奉天図書館落成に際して、衛藤は「実利主義、今日主義」のはびこる風土のなかで、創設された図書館を「小さき、可憐な、風にも耐へぬデリケートな芽」にたとえ、それをまもり育て「燎乱の花を咲かすこと」こそ、ひとびとが奉天の地に暮らす意味であり、人間として生きる意義であると、市民に訴えた。衛藤をはじめとする図書館人、あるいは図書館にかかわるもったひとたちが、東北アジア史の中心地であり奉天軍閥の根拠地において、日本帝国主義の侵略の渦中で、つねにおもいを寄せたのは「文化」の次元にかかわる問題でもあった。だが昭和十八年の満鉄図書館再編によって、貴重書の一部は大連図書館に移管され、さらに日本敗戦時の混乱と戦後瀋陽における図書館再編過程で、旧奉天図書館の蔵書は散逸解体してしまった。現在、われわれが奉天図書館の足跡をたどろうとすると、まず基礎となるのが、この度復刻される『收書月報』であろう。今日でも意味のある学術文化情報を与えるとともに、当時のひとびとの本と文化へのおもいを知り、さらには植民地における「文化活動」なるものを考えるときにも、重要な資料となりえるであろう。

満洲史、清朝史、対露交渉史など 質の高い研究論文を多数所収！

本誌の特色と主な内容

1 東洋史研究に関連した文献・記事

- 遼西交通路の変遷 (園田一亀)
- 北支五省地方志簡目 (植野武雄)
- 十八世紀に於ける日露交渉に関する覚書 (藤村孝之)
- 蘇州方志考 (植野武雄)
- 満州の民間信仰と路傍祠 (瀧澤俊亮)
- 欧米人の支那に関する著作 (野中弘)
- 満洲地方志綜合目録 (植野武雄)
- 満洲路傍祠 (ジョン・マッキンタイヤー)
- 北千島開拓夜話 (木場一夫)
- 清朝学者と地理上の分布
- 長白山史料断片 (村山釀造)
- 長白山関係書目
- フーヴィン・クライに就いて (野中六郎)
- 石本文庫目録
- 小平文庫目録
- 朝鮮の古王国高句麗の遺蹟 (平山和巳訳)
- 長白山綜合調査報告書に就いて (長島宣隆)
- 長白山文献補遺 (村山釀造)
- カムチャッカの学術調査と二名の先駆者 (三上次男)
- 近世露清関係史 (ガストン・カーエン) 連載
- ハリマン伝 (井上胤信) 連載
- 古代支那 (V・ストルーヴェ) 連載
- 燕京訪書行 (植野武雄) 連載
- 安南国漂流記に就いて (大内直之) 連載
- 奉天入城以後 (尼崎晋夫) 連載
- 満鉄精神研究素材點描 (吉村繁義) 連載
- 北緯四十九度——越前大野藩の榎太経宮—— (千田

萬三) 連載
日露戦争当時のウイッテ、クロバキトン往復書簡 (布村一夫訳) 連載

2 書誌学に関連した文献・記事

- 増加図書目録 各号
- 本館所蔵 名著解題 各号
- 本館所蔵 東洋関係選書解題
- 文献の複製 (柿沼介)
- 医籍閑話 (岡西為人)
- 好治閑事室蔵書余記 (石浜純太郎)
- 漢籍分類法変遷史 (植野武雄)

3 本誌に所収された雑誌記事索引(記事目録)

- 鉄道関係外国主要雑誌記事
- 備附雑誌分類目録
- 主要対ソ問題関係雑誌記事目録
- 主要支那事変関係雑誌記事目録
- 日本鉄道省運輸局「外国鉄道調査資料」記事目録
- 鉄道省大臣官房研究所「業務研究資料」記事目録
- 最近二於ケル主要時事問題二関スル新着雑誌記事目録

4 図書館史及び衛藤利夫関連記事

- ロシアの図書館に関する若干の資料 (布村一夫)
- 現時の図書館事業 (中田邦造)
- 巻頭言 (衛藤利夫) 各号
- 衛藤利夫先生年譜 略歴・著述目録——(植野武雄編)
- 館長退任記念特輯
- その他衛藤個人による多数の執筆記事

奉天図書館のコレクションで特筆すべきは、欧米人の東洋学研究書、中国東北地区の地方志などの充実で、世界的にも著名であった。その一部は「本館所蔵名著解題」などによって、本誌『収書月報』誌上で紹介されている。

『収書月報』解題(小黒浩司)より

「図書館の改革は、当然ながら『収書月報』の誌面にも及んだ。一九四三年二月に開催された「図書館長会議」の席上、図書館側から同誌について、「今回の機構改革を機会に内容の革新を企り、資料解題を主とし、雑誌重要記事索引、特殊文献目録、新収書目録を付す」よう改める旨の発言がなされた。

『収書月報』誌上から図書館の動静を伝える記事や読書子向けの読み物が姿を消し、かわって学術論文が数多く掲載されるようになった。こうした変化は大連図書館の『書香』にも共通してみられる。ただし論文の内容を反映すると、両図書館の位置づけの違いを反映して、『書香』掲載のものが中国全般に関する研究が多いのに対し、『収書月報』は東北アジア研究が主体となっていることがわかる。



衛藤利夫館長

衛藤利夫個人研究に欠かせない貴重な文献!

日本植民地文化運動資料③

日本植民地文化運動資料

既刊・近刊のご案内

【復刻版】 收書月報 全八巻 別冊一

刊行概要

- 第1巻 第1号(昭和11年2月)〜第11号(昭和11年12月) 全11冊
- 第2巻 第12号(昭和12年1月)〜第23号(昭和12年12月) 全12冊
- 第3巻 第24号(昭和13年1月)〜第35号(昭和13年12月) 全12冊
- 第4巻 第36号(昭和14年1月)〜第47号(昭和14年12月) 全12冊
- 第5巻 第48号(昭和15年1月)〜第59号(昭和15年12月) 全12冊
- 第6巻 第60号(昭和16年1月)〜第71号(昭和16年12月) 全12冊
- 第7巻 第72号(昭和17年1月)〜第82・83号(昭和17年12月) 全12冊
臨時特輯号含む

第8巻 第84号(昭和18年1月)〜第91号(昭和18年9月) 全8冊
別冊 解題(小黒浩司)・総目次・索引
※序文(衛藤瀋吉)は第1巻の巻頭に所収した。

体裁 ⅡA5判 / 上製本クロス装 / 函入

頁数 Ⅱ総4、130頁

定価 Ⅱ揃定価135、990円

ISBN4-89774-006-1 C3000



日本植民地文化運動資料① 既刊

日本植民地文化運動資料② 既刊

書香 (満鉄各図書館報・満鉄大連図書館報)

全158号 大正14年4月〜昭和19年12月

全8巻・別冊1 / A5・B5判・総3454頁
解題―稲村徹元 揃定価144200円

日本植民地文化運動資料④ 近刊

北窓 (満鉄哈爾濱図書館報)

全26号 昭和14年5月〜昭和19年3月

全5巻・別冊1 / A5判・総2990頁
解題―西原和海 揃定価82、400円

日本植民地文化運動資料⑤ 近刊

満洲読書新報 (満洲読書同好会会報)

全95号 昭和11年1月〜昭和20年4月

全2巻・別冊1 / B5判・総930頁
編・解題―西原和海

日本植民地文化運動資料⑤ 近刊

文献報国 (朝鮮総督府図書館報)

全90号 昭和10年10月〜昭和19年12月

全8巻・別冊1 / B5判・総5100頁
解題―藤田豊

(1993.6)

●お取り扱いは

緑蔭書房

東京都板橋区板橋1-13-1

☎03(3579)5444

(定価は税込みです)